

# 鳥取県文化観光事典

## 目次

### 【使用にあたって】

旧郡域については、巻末の地図を参照してください。

ふりがなは、スペースの都合上、該当する漢字に合わせて記載されていない場合がありますので予め御了承ください。

国及び県の指定文化財の名称及び指定時期は、原則として指定の官報（公報）告示に拠りました。

動植物の名前は、原則としてカタカナで表記していただきます。（特産物など一部のものを除く。）

項目の頭の「史跡」「名勝」の記載は、国、県、市町村が「史跡」「名勝」に指定しているものについて表示しています。

開館時間・問合せ先は紙面の都合上、原則として娯楽施設・博物館など「施設紹介」として取り扱ったものに限らせていただきました。  
なお、開館時間を記載していますが入館時間に制限がある場合がありますことを予め御了承ください。

範囲が広範囲にわたるものなどについては、交通アクセスを記載していない場合があります。また、複数の方法がある場合がありますので目安としてください。

總

論

# 総論

## 【概況】

### 豊かな自然

鳥取県は北は日本海に臨み、南には秀峰大山を含む中国山地が控えている。この地形が四季をより鮮やかなものとし、さまざまな表情を見せるだけでなく、豊かな自然を育んでいる。鳥取砂丘をはじめ大山、浦富海岸、県内各地に点在する美しい渓谷など、自然が創る芸術にあふれている。また、県内各地に温泉が湧出していることも鳥取県の特徴の一つである。世界有数のラジウム含有量を誇る三朝温泉、白砂青松と大山の眺望が美しい皆生温泉、山陰最古の温泉である岩井温泉などがある。近年、淀江町、中山町などでも温泉が発掘され、新たな観光ポイントとなっている。

### 交流今昔

日本海は松葉がにや白イカなどの特産物を産する海であるばかりでなく、古くから大陸と人、もの、文化などが行き交った交流の海でもあった。近年、県内から日本最大級といわれ、弥生時代のクニのようすをとどめた妻木晩田遺跡<sup>むきばんだいせき</sup>や、豊富な出土品から弥生の博物館といわれる青谷上寺地遺跡<sup>あおやかみじちい</sup>などが発見された。これらの遺跡から大陸との交流をうかがわせる遺物が多数出土している。

平成九年（一九九七）、境港市で開催されたジャパンエキスポ鳥取97「山陰・夢みなと博覧会」は、「翔け、交流新時代へ」をテーマに開催され、国内外から県人口の三倍以上の百九十三万人の人が訪れた。

現在、県では韓国をはじめ日本海対岸の諸国と、文化、学術などさまざまな分野での交流が取り組まれている。平成十三年（二〇〇一）四月には米子 韓国・ソウルを結ぶ定期航路が開設され、さらに両地域は近くなっ

### 鳥取の力

また、鳥取県の自然や風土の中でこそ育まれた農産物や培われた最先端技術がある。

鳥取砂丘には世界のいろいろな砂漠地の気象条件を再現することのできる乾燥地研究センター・アリドドームがあり、乾燥地研究の拠点施設として乾燥地農業などの研究が進められている。このほかにも氷温技術や、特産物である力二の殻から採取したキチン・キトサンを活用した製品開発などがある。

ながいも、らつきょう、ぶどう、白ネギなどの農産物は、先人が長年砂丘地に挑み努力して耕作した結果、今や県を代表する農産物となっている。また、二十世紀の鳥取県の農業を牽引してきた「二十世紀梨」は、現在も国内で生産量第一位を誇る。一方で、「ゴールド二十世紀梨」「おさゴールド」など新たな梨の研究、栽培も進められている。

### 県民の財産

県内には、**大国主命**<sup>おほいぬしのみこと</sup>をはじめ多くの神々にまつわる神話や、歴史の舞台となった場所があるほか、三徳山三仏寺や仁風閣をはじめ国宝・重要文化財などに指定された文化的価値の高い建築物や昔ながらのまち並みが残っている。

現在、県では自然あふれる豊かな風土、そこに秘められたさまざまな魅力や良さ、長年受け継がれてきた伝統などを守り育むとともに、文化と観光面を生かしながらその良さを多くの人に知っていただくことに取り組んでいる。

## 【鳥取県の歴史】

古代

鳥取県内で人の生活が始まったのは、旧石器時代にさかのぼる。西伯郡淀江町の原畑遺跡では石製のナイフ形の石器が発見されている。

縄文時代になると、人々は丘陵地や湖などの水辺に集落を形成し始めた。狩りをし、食べ物を採取し、火を用い、土器や木器を作っていた。この時代の代表的な遺跡である上福万遺跡（米子市）では、埋葬施設と考えられる穴（土ごう）や集石遺構、縄文土器などが発見されている。水辺の集落では人々が食べた貝の殻が捨てられた貝塚や魚類を含む残さいが、また、湖山池の南岸に位置する桂見遺跡では、全国最大級の丸木船が二艘出土するなど場所によっても生活に違いがあることが遺構や出土品からうかがわれる。

大陸から稲作が伝わったのは今から二千数百年前といわれる。そして弥生時代には稲作が本格的に始まった。鳥取県内では米子市の目久美遺跡で初めて水田跡が発見された。稲作の始まりは人々を定住させ、よりまとまった機能的な集落の形成へつながった。これらの集落は、外敵から守るために村の周囲に壕をめぐらした環壕集落である。集落の内部には竪穴住居や食糧などを蓄えた貯蔵穴が発見されている。この時代の代表的な遺跡としては、尾高浅山遺跡（米子市）、宮尾遺跡（会見町）などが知られる。また、青木遺跡（米子市）は、住居跡など千基にのぼる遺構が発見された西日本最大級の弥生遺跡である。竪穴住居と掘立柱建物が見られる。ほかにも集落跡からは甕や高杯など多量の弥生土器が出土している。また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓が出現した。四隅突出型墳丘墓は出雲地方を中心につくられ始めた墓であり、県内でも尾高浅山遺跡や阿弥大寺墳丘墓群などで発見されている。

近年発見された妻木晩田遺跡は、弥生時代の集落跡としては日本最大と

いわれる。この遺跡は居住、防衛、埋葬などの機能ごとに区切られているのが特色である。また、住居跡や墳丘墓などを通して弥生時代中期から古墳時代までの集落の変遷がわかる。

やがて古墳が出現し始める。古墳はその地域を治めていた権力者のものと推察される。国分寺古墳（倉吉市）では、副葬品として埋められた中国製の三角縁神獣鏡などが発見されている。また、橋津古墳群（羽合町）では大型の前方後円墳が発見され、墳丘は川原石が葺かれ、埴輪がめぐらされていた。また、勾玉や鉄刀など豊富な副葬品などからも、当時、東郷湖周辺を治めていた人の力の大きさをうかがい知ることができる。また、天神川河口近くの砂丘の中から発見された長瀬高浜遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

古墳時代後期は、県内の地域でも古墳の構造に違いが見られる。また、他地域の影響を示す副葬品が出土している。例えば、石馬谷古墳の石馬は九州で見られるもので、何らかの交流があったことを示すものとして興味深い。



西暦六四五年の大化改新以来、律令制的な諸制度が徐々に導入されてゆき、七〇一年の大宝律令で律令国家が完成する。その地方支配はまず国を置き、その内部をいくつかの郡に分けて統治するものであった。

鳥取県域は東部が因幡国、西部が伯耆国とされ、因幡に巨濃郡以下七郡、伯耆は河村郡以下六郡が置かれた。

国の役人は「国司」で、都の貴族・官人が任命された。任期は四、六年で、

その間は任国に赴いて支配にあたった。国司の長官は「守」であるが、奈良時代の著名な人物としては伯耆守山上憶良や因幡守大伴家持などがいる。国の役所を「国庁」といい、国庁を含む一画が「国府」と呼ばれた。因幡国の国庁は岩美郡国府町中郷、伯耆国は倉吉市国府、国分寺にあった。どちらも発掘調査が行われているが、特に伯耆の国庁跡はほぼ全域が発掘され、国の史跡に指定されている。

「郡司」（郡の役人）には、その地方の古くからの豪族が任命された。たとえば墓誌・骨蔵器で有名な伊福部徳足比売は、因幡国の伝統的豪族である伊福部氏の出身であるが、同氏は奈良時代には法美郡の郡司であった。なお、伊福部氏はのちに因幡国一宮宇倍神社の神主となり、伊福部系図（「伊福部臣古志」）を伝えている。

白鳳時代〜奈良時代にかけて、仏教がこの地方にも急速に広まった。この時期に建立された地方寺院の跡が因幡十一か所、伯耆で十三か所確認されている。それらのうちで最もよく知られるのは、西伯郡淀江町の上淀廃寺であろう。一九九一年、壁画の断片が発掘され、一躍有名になった。これらの寺院は郡司など地方豪族が建立したもので、彼らの力の大きさをうかがわせる。

ところで、因幡・伯耆地方は、古くから朝鮮半島・大陸と直接的な交流をもっていた。上淀廃寺の出土物にもそのことをうかがわせるものがあるが、九世紀には新羅商人の往来がみられ、新羅海賊に対する警固命令も出されている。また、渤海の使節も九世紀末と十世紀初頭の二度、伯耆に來着している。

平安時代後期になると荘園（中央の有力者の私有地）が急激に拡大していった。因幡・伯耆も例外ではない。それらは、地方豪族が私領を皇室・貴族・大社寺等に寄進することによって成立したものであるが、地方豪族は寄進後もその現地支配者（下司）としての権限を持ち続けた。ただこの

時期に、荘園になっていない土地（国衙領という）もかなり残っていた。郡などの国家的な支配制度もまだ十分に機能しており、郡司はなお強い力を持っていた。その郡司や荘園の下司などの地方豪族は、平安後期には治安の悪化などの理由から武装を強化し武士となっていく。因幡では長田氏、伯耆では小鴨氏、紀氏などが知られる。また、大山寺や三徳山三仏寺などの有力寺院は多数の僧兵を抱えており、こうしたさまざまな武力が平安末期の争乱状況を生みだしていった。

## 中世

一一八〇年、関東で源頼朝によってあがった打倒平氏の火の手は、またたくまに全国に広がっていった。伯耆国でも、東部の小鴨基保（平氏方）と西部の紀成盛（反平氏方）、さらに、それに大山寺と三徳山がからみ、激しい戦闘があった。

頼朝は鎌倉幕府を樹立し、国ごとに「守護」を、国内の荘園・国衙領に「地頭」を置いたが、守護、地頭に任命されたのは、ほとんどが東国の武士であった。彼らは鎌倉末ごろまでには一族を移住させ、その地域の有力な武士として戦国期まで勢力を張った。毛利氏（私部）、伊田氏（大江）、矢部氏（若桜）などはいずれも東国出身の武士である。鎌倉時代は東国武士が全国に拡大していった時代だったのである。

鎌倉末期、隠岐国に流されていた後醍醐天皇は、一三三三年、伯耆国に脱出し、船上山（東伯郡）から全国に倒幕の命を発した。これを支援したのが、名和長年らの伯耆の武士である。

南北朝時代になると、半世紀にわたって続いた戦乱の中で、地方武士（地頭）を指揮、統率する役目をもつ守護が実力を蓄えてくる。南北朝初期に伯耆の守護となった山名時氏は中央の政争に乗じ、観応二年（一三五）一）以降、但馬、因幡、美作なども実力で支配下に置いた。

貞治三年（一一三六）の幕府との和睦の際には、時氏はこれらの国の守護に任せられた。山名氏は明德二年（一一三九）の明德の乱によって大きく力を削がれたが、因幡、伯耆、但馬の三国については、守護職が認められた。その結果、この三国については戦国時代の後半まで山名氏の支配が続くことになる。

しかし、その支配は他の守護大名と同様、決して強固なものではなかった。応仁の乱（一四六七～一四七七）を契機に、因幡では有力国人の反乱が続く、因幡の山名氏は衰退した。伯耆でも守護家の相続争いに出雲の尼子氏が介入し、大永年間（一五二二～一五二七）には、伯耆の西半分は尼子の勢力下に入っていた。尼子氏は天文年間（一五三二～一五五四）のころには因幡まで影響力を行使するほどになっていく。

尼子氏は永禄九年（一五六六）毛利氏によって滅ぼされ、因幡・伯耆は毛利氏の勢力下に入る。天正初年（一五七三）には、尼子再興をめざす山中鹿之助と毛利氏が、因幡を戦場に合戦をくりひろげ、さらに天正八年（一五八〇・一五八一）には、織田方の部将・羽柴（後の豊臣）秀吉が因幡に入り、毛利方と激しく戦った。その最終戦が天正九年七月～十月の鳥取城包囲戦であった。この戦いは「鳥取城の渴え殺し」と呼ばれる悲惨な状況を生みだした。

鳥取城落城後、秀吉は、鳥取、鹿野、若桜のそれぞれに宮部継潤（鳥取城）らを配し、因幡経営の体制を整えた。伯耆については、東三郡（河村・久米・八橋）が織田に味方した南条氏の領国となり、毛利氏の将吉川氏が西三郡（汗入・会見・日野）を領有することで、秀吉と毛利方の国境が確定した。この体制は関ヶ原合戦まで続くが、その戦後処理で亀井氏を除く諸氏は領地を没収され、代わって池田長吉（鳥取城）、山崎氏（鬼ヶ城）、中村氏（米子城）が入国してくる。近世の始まりである。

## 近世

豊臣氏滅亡の二年後の元和三年（一六一七）、播磨国姫路城主であった池田光政が因伯三十二万石を支配する鳥取城主に転封され、翌年入部した。さらに寛永九年（一六三二）、因幡鳥取の池田光政と備前岡山の池田光仲の国替えが発表された。これ以降光仲の系統が明治維新まで続くこととなる。また、伯耆の十八か村三千石は大山寺領として明治維新まで存続するが、ほぼ今日の鳥取県の境界がこれによって確立された。このうち、米子、倉吉、松崎、八橋などの町では家老が町方と寺社について自分手で行う「自分手政治」が行われた。

藩政は家老が奉行を指揮して月番で担当、藩主には直接の補佐役である用人と目付役が側近としてついた。役所は鳥取城の二の丸（のちに三の丸へ移る）で、用人、目付役、勘定頭、裏判吟味役などがつとめ、郡代、町奉行、普請奉行、寺社奉行らに指示を与えた。

城下町鳥取は元来、六万石規模だったので三十二万石を受け入れるために城下の拡張が行われ、池田光政の時代には今日の鳥取市の原型が形成された。米子の町も吉川広家の時代に湊山の築城とともに城下町が建設され、池田光仲の家老・荒尾但馬守の城預かりの時期までに城下町はほぼ完成を見た。倉吉の城下町の形成は天正年間の頃とされる。池田光政時代の伊木長門守によって陣屋を中心に町づくりが進められた。

江戸時代の各藩ともそうであったが、鳥取藩でも藩祖・池田光仲の時代に早くも財政難に苦しめられた。このような財政難を解消しようと元禄十一年（一六九八）から米村広治を中心として施行されたのが、請免制と呼ばれる貢租の定額化であった。これにより藩財政は安定したが、凶作時に藩と農民の対立は一気に表面化することになり、享保二年（一七一七）以降、規模の大きな一揆が起こるようになった。中でも元文四年（一七三九）の大凶作をきっかけとした一揆は、因伯両国にわたる大規模なものであった。

嘉永三年（一八五〇）八月、鳥取藩は水戸の徳川齊昭の五男・慶徳を藩

主に迎え藩政改革に着手する。この改革は経費不足に加え改革派と守旧派の対立などで失敗する。

幕府は内憂外患で、鳥取藩も尊王攘夷と佐幕の間で難しい選択を迫られていた。攘夷の立場を取っていた鳥取藩でも「黒船」の来航に備え、藩内各地に御台場を造り警戒を強めた。藩営で銃砲製造を行うこととし、中部の六尾村に二基の反射炉を建設させた。藩主・慶徳は、「尊王敬幕攘夷」という折衷案を考えていたようだが各派閥、特に過激派の動きに翻弄され、何一つ実現できなかった。鳥取藩は幕府と薩長が戦った慶応四年（一八六八）の鳥羽伏見の戦い以後、薩長側に立って戦闘に参加し、東北地方にまで転戦した。このときに鳥取藩の主力として活躍したのは足軽と農兵を中心とした銃兵であった。

#### 《産業》

自給自足が原則であった封建時代の農村においても、農業における生産力の発達に伴い商品経済の発展がみられるようになった。

特に木綿の栽培は、よい砂質を持つ伯耆で盛んに行われ「伯州綿」と呼ばれるほど盛んになった。木綿に関係して染料の藍の生産も盛んになり、赤碇、御厨では紅花が盛んに作られた。伯耆で木綿が盛んだったのに対し、因幡では蠶と紙が代表的な特産品であった。

この他、中国山地の山間に位置する日野郡では鉄山の経営が行われた。また、中部の倉吉では農業生産の向上に大きな役割を果たした稲扱千歯が製造され、全国へ販売された。

商品経済の発達は社会的分業を進め、農村内部に商工業従事者を生み出していき、藩は生産減少を警戒してたびたび在郷商人の抑制・禁止を出したが、農村内部の商品経済の発達を止めることはできなかった。

#### 《文化・教育》

文化事業に力が入られ、まず、鳥取藩の藩校・尚徳館が宝暦七年（一

七五七）二月に開校した。ただし、従士以下や農商工の者は入学できなかった。尚徳館では主に儒学を中心とした学問が行われ、後に武術の稽古場なども作られた。さらに幕末には尊王攘夷の高揚から国学や兵学も開講された。

十九世紀に入ると農村でも読み、書き、そろばんの寺子屋がみられるようになる。また、寺子屋よりもやや高度な私塾も開かれた。

#### 藩政時代の文人たち

「文人」とは文筆にたずさわる人をいう。特に詩文、書画をとおり、洗練された趣味を持った人を指す。鳥取藩政時代の代表的な文人として、建部樸斎（一七六九～一八三八）、正埴適處（一八一八～一八七五）、牧野芝石（一八四〇～一九〇三）の三人があげられる。

建部樸斎は、鳥取で南画を最初に描いたといわれる。鳥取藩西館の池田定常に仕え、経書を講義し詩作の相手を務めた。建部の絵の特徴として詩画一体があげられる。作品には、『老樹図』『帰牛図』などがある。

## 因幡国

因幡国は、律令制度の地方支配単位に起源がある。その設置は、七世紀終わりごろのことであった。ただ、「いなば」という地域名は六・七世紀ごろからあったようである。奈良時代、因幡国は巨濃・法美・八上・知頭・毘美・高草・気多の七郡に分かれ、その内部はさらにいくつかの郷からなっていた。国の政庁(国庁)は法美郡稲羽郷(岩美郡国府町)に置かれていた。因幡国内を官道の山陰道が東西に貫き、これは但馬・丹波を経由して都につながっていた。

ただ、因幡と都との往来は、志戸坂峠(八頭郡智頭町)を越えて山陽道に合流するルートが用いられることが多かった。十一世紀末に因幡守平時範が赴任してきたときの記録では、志戸坂峠を越えて往復している。これは近世になっても変わらず、鳥取藩の参勤交代路として利用された。中世には、南北朝前半の山名時氏以降、代々山名氏が守護に任ぜられ、戦国時代半ばまで山名氏の領国となっていた。守護所(守護の役所)は、室町時代中ごろからは天神山城(鳥取市布勢)であった。十六世紀後半になると山名氏は没落し、代わ

って尼子氏、毛利氏、織田氏の勢力が相次いで進出し争奪を繰り返した。しかし、天正九年(一五八一)の羽柴秀吉による鳥取城攻略によって因幡国は織田氏の支配下に入り、争乱は終結した。

豊臣政権下では宮部氏(鳥取城)・鳥取市)・亀井氏(鹿野城)・気高郡鹿野町)・垣屋氏(桐山城)・岩美郡岩美町)・木下氏(鬼ヶ城)・八頭郡若桜町)によって分割支配された。

慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦後は、宮部氏らが改易され、池田長吉(鳥取城)、亀井氏(鹿野城)、山崎氏(鬼ヶ城)によって分割支配するところとなった。三氏はそれぞれ居城を近世的な城郭に修築し、城下町も整備した。鹿野町、若桜町も今にその面影を残している。

元和三年(一六一七)、池田光政が因幡・伯耆二国の大名に封ぜられ、鳥取城と鳥取城下町が拡張、整備された。現在、残る町割りなどはこのときのものである。

光政は、寛永九年(一六三二)に従兄弟である岡山城主・池田光仲と入れ替わりに岡山に転封になり、以後は、光仲の子孫が鳥取藩主として明治維新まで続いた。

## 伯耆国

「はきはきほつき」という地域名は六・七世紀に成立していた。

ただ伯耆国の直接的な起源は、七世紀末に定められた地方行政単位「伯耆国」にある。山陰道に属し、国内は河村・久米・八橋・汗入・会見・日野の六郡に分けられていた。国の政治の中心である国庁(国府)は久米郡八代郷(倉吉市国府・国分寺)に置かれていた。

古代から伯耆国では、大山寺(西伯郡大山町)、三徳山三仏寺(東伯郡三朝町)、船上山(東伯郡赤碕町)など、山岳仏教寺院が修験道場として栄えた。大山寺、三徳山に残る建築物・仏像などが往時をしのばせている。

一三三三年、隠岐国を脱出した醍醐天皇は、船上山から全国の武士に鎌倉幕府打倒の命を發した。このとき天皇を助けた地元の武士・名和長年は、建武政権で重職を得ている。

南北朝初期には山名時氏が守護に任じられ、その後、戦国時代の初めごろまでこの地域を支配した。

しかし、十六世紀になると隣国出雲の戦国大名尼子氏が勢力を拡大し、伯耆に進出してくる。永禄九年

(一五六六)、尼子氏が滅亡した後は、毛利氏の支配下に入り、天正十年(一五八二)の羽柴(豊臣)秀吉と毛利氏の国境確定後は、東伯耆三郡(河村・久米・八橋)は羽衣石城(東伯郡東郷町)の南条氏の領国となり、西伯耆三郡(汗入・会見・日野)は毛利氏の将であった吉川氏が支配した。関ヶ原の合戦で西軍に味方した南条・吉川氏は領国を没収され、代わって伯耆一国を中村氏が領有することになった。中村氏は、吉川氏が築き始めた米子城を完成させ、米子城下町の整備を行ったが、のちに改易され、元和三年(一六一七)に池田光政が因伯二国の大名として入封した。

寛永九年(一六三二)に岡山の池田光仲が光政と入れ替わりに鳥取城主となり、以後、明治維新まで続いた。米子城は筆頭家老・荒尾氏が城預となって守備した。



## 《政治》

慶応四年（一八六八）七月、鳥取藩は東京行幸供奉を命じられ、それを機に藩主・慶徳は新政府と直接連絡をとるようになった。明治二年（一八六九）一月には薩長土肥に続いて版籍を奉還し、同年六月に改めて慶徳は鳥取藩知事に任ぜられた。

明治四年（一八七一）七月十四日に廃藩置県が断行され、因幡国八郡と伯耆国六郡、播磨国の神東、神西、印南の三郡のうち二十四か村が鳥取県となった（後、播磨国の分領は姫路県へ編入）。ついで、隠岐国四郡も編入した。藩知事にかわって政府任命の県令（現在の知事のようなもの）が置かれることとなり、初代県令は尊攘派として維新期に活躍した鳥取県土族の河田景与であった。同五年（一八七二）四月には「鳥取県職制」が定められ、藩にかわる新しい県庁と県吏の役割が定められた。さらに県政を施行していくにあたり、県民の意向を知る必要から鳥取の慶安寺に議事所を開設し、県政各般にわたって意見を交換した。

こうしたものは地方議会の先駆的役割を果たした。国家財政の中核となる地租については明治六年（一八七三）七月に「地租改正条例」が公布され、地価の調査決定の事業が進められていくが査定は割高であり、農民たちは江戸時代の請免制による租額とかわらない地租額を押し付けられることとなった。

因幡・伯耆に隠岐の三か国を管轄していた鳥取県は、明治九年（一八七六）八月二十一日で廃止され鳥根県に併合された。秩禄処分で窮迫していた旧藩士族らは不満を高め、国会開設運動や自由民権運動などに参加して共立社などの政治結社を結成し鳥取県再置運動を進めた。

政府も山県有朋を派遣して実情を調査し、明治十四年（一八八一）九月

十二日、鳥取県が再置された。ただし、因幡に比べ人口の多い伯耆からは因・伯の人情、地理の相違、鳥取までの距離などから再置への反対などもあった。このような因・伯の地域対立はしばしば県会の運営にも反映された。さらに、大正三年（一九一四）十二月にも鳥取、鳥根両県の合併が両県会で決議されたものの実施にまで至らないなど、両県合併の動きはその後長く尾を引いた。

鳥取県再置後の初代県令は山田信道であった。山田は産業近代化のためにも道路の開設整備が鳥取県にとって緊急の課題であるとし道路整備に着手した。このほか、土族の窮乏を救うべく、北海道への移住が進められ、釧路や岩見沢などに入植が行われた。

明治二十二年（一八八九）、大日本帝国憲法が公布され、翌年には総選挙があり、県内からも三人が当選した。続いて、第一回帝国議会が開かれ近代国家としての体制が整った。鳥取県では明治二十二年十月一日から市町村制が施行された。市制は鳥取に施行され、初代市長には岡崎平内が選任された。米子、倉吉、境、淀江には町制が施行された。地方制度の確立とともに県議会の活動が活発となり、県政の基礎が固まっていた。

明治維新後、農林業の近代化に遅れを取り、伝統的産業の近代対応も遅れていたため近代的工場の稼働も限定されていた。なによりもその最大の要因は全国の都市や市場につながる交通体系の不備であった。初代県知事の山田信道は道路建設事業に当たった。明治四十五年（一九一二）京都出雲今市間の山陰線（現山陰本線）が山陽側に二十年遅れて開通し、文化、産業の発展に大きな影響を与えた。明治三十年（一八九七）、日清戦争後の軍備増強のなかで鳥取市に歩兵第四十連隊が設置された。

大正デモクラシーの流れのなか、県下でも都市部の青年層により護憲運動が推進された。さらに第一次世界大戦後の産業発展は、さまざまな社会問題を生み出した。県内でも民主主義、普通選挙の要求が高まり、政治だけでなく教育や文学、芸術方面にも大きな影響を与えた。

## 《教育》

明治五年（一八七二）学制が發布され、義務教育と公立学校の原則が確立されたが、就学率が九割台に達するのは明治三十年代の半ばになってからであった。

明治六年の鳥取変則中学に始まる中等教育は、明治十九年（一八八六）に一県一中学で鳥取中学校だけとなるが、同三十二年（一八九九）に米子に、同四十二年（一九〇九）に倉吉に中学校が開設された。四十三年（一九一〇）には鳥取商業が、また十八年には倉吉農学校が全国に先駆けて創立となった。二十一年（一八八八）には婦人会による鳥取女学校が開校し、三十年（一八九七）に鳥取市立高女となった。さらに、明治四十三年には遠藤董らにより鳥取盲啞学校が開校された。

大正十年（一九二一）に開校した鳥取高等農業学校は、砂丘の開発とその利用、二十世紀梨や因伯牛の研究などに貢献した。

## 《産業の変遷》

明治も半ばを過ぎると、産業における近代化が軌道に乗りだしていく。なかでも木綿は、江戸時代より鳥取を代表する重要物産で、明治に入っても西部を中心に盛んであった。明治半ば以降、輸入綿糸の急増と良質で廉価な綿布に対して、紡績糸を主原料とするようになり綿作は衰退する。

その一方で、鳥取、倉吉、米子に蚕種検査所を、県立農事試験場に蚕種製造所が設けられ、鳥取県は全国有数の養蚕地域となった。これにともない、県内各地に製糸工場が作られた。明治後期になると工場はしだいに機械化され、蒸気機関を使用して大規模工場が設立された。しかし、製糸業は第一次世界大戦の戦後恐慌以降、衰えを見せ、大正期には県外の大製糸資本にとってかわられる。

倉吉農学校や県立農業試験場の設立、巡回教師による改良普及活動などによって、農業の近代化が図られた。また、中井太郎による農事改良は

全国に普及し、稲作の能率化に大きな役割を果たした。

機械船の導入に伴い、沿海漁業から沖合漁業へと漁業も近代化された。なかでも奥田亀造、徳田平市兄弟は角輪組を組織し、朝鮮半島を中心としてトロール漁を開始した。

日野郡の製鉄業はすでに幕末の開港以来、安い外国産の輸入により大きな影響を受けていた。根雨の近藤喜八郎は旧式の製鉄から近代的な製鉄業への転換を図り、二部村上代に福岡山製鉄所を建設し、蒸気機関を備えて操業を開始した。明治三十七年（一九〇四）には米子に近代的工場である米子製鋼所が坂口平兵衛らにより発足された。

また、倉吉の稲扱干歯いなこぎせんばは江戸時代より鳥取藩の特産として広く全国に普及していた。山陰線（現山陰本線）の開通とともにさらに商圏を広げたが、第一次大戦後、足踏式回転脱穀機の登場により稲扱干歯は大正十一年（一九二一）に姿を消した。

鳥取県では、元来、鳥取藩の御用紙として因州和紙が作られていた。

明治二十年（一八八七）、県は高知から教師を招き、三桮栽培と土佐の製紙法の普及のため、佐治村と倉吉市に製紙伝習所を開設した。改良製紙法が在来技術にとってかわった。さらに明治二十九年（一八九六）以降、蒸気機関が導入され、和紙生産も近代化が図られた。しかし、生活様式の変化とともに和紙の占める位置は大きく後退し、ほとんどが機械生産による安価な洋紙にとってかわられた。

【鳥取県の自然・風土】

鳥取県の地形、地質

鳥取県の面積は三、五〇七平方キロメートルで、東西に約一〇〇キロメートルと長く、南北には比較的短く約四〇キロメートルである。南に中国山地が位置し、県内の河川はすべて北の日本海に注いでいる。

鳥取市、米子市は、プサン（韓国） アルジエ（アルジェリア） オクラホマ（米国）と同緯度に位置し、経度ではウラジオストク（ロシア連邦）、オーストラリアの中央砂漠とほぼ同じ位置にある。

山地の面積が、県全体の八十六パーセントに達する。鳥取県を東部、中部、西部と分けることが多いが、それぞれに大きな河川、平野、砂丘地があり、火山がそびえ、平野には城跡の建っていた孤立丘がそびえている。千代川の上流部には八頭の山地、日野川の上流域には日野の山地がある。

鳥取県を構成する地質は山地に多い三郡変成岩で、全県的には花崗岩質の岩石が多いが、第三紀層が鳥取平野の南と米子市の南方に発達している。鉢伏山安山岩や大山、扇ノ山溶岩は火山岩である。砂丘や砂州は最も新しく第四紀にできた。

花崗岩地では砂鉄を集めるかんな流しが盛んに行われた。鳥取県には豊富な水資源があり、表流水、地下水の多さは地形と気象の特質がもたらしたものであり、温泉の豊富さも地質に関係している。景観にも恵まれ、県内には多くの名勝、旧跡、天然記念物があり、国立公園、国定公園、県立公園および自然環境保全地域がある。なかでも大山、鳥取砂丘と浦富海岸、温泉は鳥取県の代表的な観光地となっている。

鳥取県のなりたち

地 質	時 代	できごと	該当する主な地層	
1万年前	第四紀	完新世	砂州の形成 平野の形成	クロボク、新砂丘（クロスナ）
		更新世	砂丘の形成 段丘の形成 大山火山活動	北条砂丘・鳥取砂丘 大山火山灰層
175万年前	新生代	鮮新世	中国山地の上昇 火山活動	扇ノ山、氷ノ山火山岩類、鶴田玄武岩
			深成作用	長砂流紋岩
530万年前	第三紀	中新世	日本海域の縮小 日本海の拡大 日本海の誕生 海底火山活動	三朝層群 三徳累層 鳥取層群、多里層 小鹿累層
			古第三紀	因幡期貫入岩類
2300万年前 6500万年前	中生代	白亜紀	深成作用 陸化・火山活動	用瀬期貫入岩類
		ジュラ紀	変成作用	
		三畳紀		
2億4500万年前	古 生 代	海の時代	八東層・智頭層・志谷層	
5億4000万年前			片麻岩類（溝口町）	

## 鳥取県の気候

鳥取県は日本海に面し、太平洋側の各地域と比べると、冬季の日照時間や降水量に大きな差が見られる。

冬季は、シベリアの高気圧から吹き出す寒冷で乾いた北西の季節風が、日本海をわたる間に水分を補給し、中国山地を上昇する際に雲を発生させ、日本海側に雨や雪をもたらす。このため、冬季は降水量が多く、年に何度か大雪が降ることもある。日照時間も少なく日中の気温も低いが、雲に覆われるため夜間の冷え込みはそれほど厳しくない。大陸の高気圧が強く張り出す時は、太平洋側は晴天で空つ風が吹き抜けるのに対し、日本海側は鉛色の空に、北西の季節風が吹き抜け、時には雷雨や雪を降らせる。特に県東部や山間部では降水量が多く、雪も多い。

また、沿岸部と山間部では、気温や降水量に差が見られる。夏は、北海道を除く日本列島全体が、太平洋高気圧の影響を受け、高温多湿となり、冬季のように日本海側と太平洋側との差異は認められない。年平均の気温は、日本海を流れる対馬海流の影響を受け比較的温暖である。



## 日本海

アジア大陸の東縁に位置する縁海の一つ。大陸縁辺で島や半島に囲まれた海を縁海とよび、アジア大陸東縁ではほかにオホーツク海や東シナ海などがある。

日本海は、その中央部の海底の高まりである大和海嶺、朝鮮海台を境に北部の日本海盆と南部の大和海盆・対馬海盆に分けられる。日本海盆は水深三、七〇〇メートルに達し、海底は厚い堆積物により平坦で、地殻は薄く大洋的である。

これに対して、大和海盆や対馬海盆は、水深約二、〇〇〇メートルとより浅く、海底の地形には起伏があり地殻は大陸と海洋の中間的な性質をもつとされる。大和海嶺は、大和堆と北大和堆からなり、最も浅い所の水深は、それぞれ二三六メートル、三九七メートルである。この高まりの延長は、隠岐諸島をのせる隠岐海脚（尾根状の海底の高まり）を経て山陰海岸へと連なっている。

日本海の成因については、もともと大陸であった所が削剥され陥没して海になったという陥没説、あるいは大陸の縁辺に裂け目ができそれが拡大して海になったという海底拡大説などがある。いずれの場合も、およそ二千万年前の中新世初期に始まったとする意見が強い。

日本海と周辺の海は、間宮海峡、宗谷海峡、対馬海峡など水深が二〇〇メートルより浅い海峡で繋がっているが、海水面が低下した氷河時代にはこれらの海峡部は陸化し、日本海は閉ざされていたと考えられている。

現在、この日本海に対馬海峡や朝鮮海峡を通じて南方から対馬暖流が流入し、冬季には大量の水蒸気を発生して日本海沿岸部の豪雪の原因となっている。

また、流入した暖流と日本海固有の冷水は混合することなく潮目を形成し、その付近はプランクトンが豊富であり、良好な漁場となっている。

県内の国立・国定公園

【山陰海岸国立公園】

鳥取砂丘から京都府網野町にいたる国立公園。全長は七五キロメートル、陸地面積は八、七八四ヘクタール。昭和三十八年（一九六三）七月に国立公園に指定された。鳥取県・岩美町から兵庫県・竹野の間には、日本海の荒波がつくった断崖、岩礁、小島などの変化に富んだ見事な海岸が約一五キロメートルにわたって続いている。岩美町の浦富海岸は、「山陰の松島」といわれ洞門、洞窟、奇岩などが多く見られ、国の天然記念物にも指定されている。昭和四十六年（一九七一）一月には、田後地先の海面九・八ヘクタールが海中公園に指定された。

また、浦富海岸の東に広がる鳥取砂丘は東西一六キロメートル、南北二キロメートルの海岸砂丘である。ここでは砂簾、砂柱、風紋といった自然がつくる砂丘独特の現象や植物を見ることができる。

【大山隠岐国立公園】

中国地方の最高峰・大山をはじめ蒜山、三瓶山などの山々とその麓に広がる高原、島根半島、隠岐島からなる国立公園で、面積は三五、〇五三ヘクタールである。

昭和十一年（一九三六）二月に大山は「大山国立公園」として指定され、昭和三十八年（一九六三）七月に蒜山や隠岐島まで拡大し、名称も「大山隠岐国立公園」に改められた。そして、平成十四年（二〇〇二）三月にはカタクリの自生地として知られる毛無山やブナ、ミブナラの自然林がのこる宝物山も含まれた。大山は、春は新緑、夏は登山、秋は紅葉、冬はスキーと一年を通じて楽しむことができる。また、古くより山岳仏教が盛んでいろいろな史跡や文化財も多い。

【氷ノ山後山那岐山国定公園】

鳥取、兵庫、岡山三県にまたがり、中国山地の東端に位置する。面積は四八、八〇三ヘクタール。昭和四十四年（一九六九）四月に国定公園に指定された。

中国山地第二の高峰・氷ノ山を中心に扇ノ山など千メートル級の山々が続く。鳥取県では東から河合谷高原、扇ノ山、氷ノ山、那岐山などが県境に沿って指定されている。氷ノ山は、ブナの原生林などすばらしい自然にも恵まれ、夏は登山、冬はスキー場と知られる。また、天然記念物であるイヌワシをはじめサンショウウオなど生息する動物は変化に富んでいる。このほかにも紅葉で知られる芦津溪などが含まれる。

【比婆道後帝釈国定公園】

鳥取、島根、広島県の三県にまたがり、中国地方のほぼ中心部に位置する。面積は七、八〇八ヘクタール。昭和三十八年（一九六三）七月に国定公園に指定された。

鳥取県内では、日南町と島根県との県境にある道後山と日南町と島根県境にある船通山が含まれる。道後山はかつて放牧場として利用されていたなだらかな高原が広がり、ハイキングが楽しめる。また、ツツジの名所として知られる。

また、船通山は「八俣のおろち」で有名な素戔嗚尊の神話にちなんだ伝説や地名が残っている。山頂近くには樹令二千年といわれる天然記念物の大イチイがある。春にはカタクリの可憐な花が美しい。山頂まで遊歩道も整備され、春から秋にかけてハイキングが楽しめる。

### 【県の鳥】オシドリ

ガンカモ目ガンカモ科の水鳥で、冬季の雄は美しく、銀杏羽という翼の風切羽の一部はイチョウの葉の形に似ている。それを帆のように立てている。他のカモ類と異なつた習性があり、開けた水面ではなく陰を好み、巢も樹木の洞中につくる。アジア東部に分布し、鳥取県ではカルガモのように渡りをすする鳥と留まつて営巣する鳥がいる。

冬季の鳥取県では東郷池や日野町の鶉の池をはじめ、多くのため池や河川に見られる。日野町根雨では餌付けをされた数百羽が日野川に集まる。



### 【県の花】二十世紀梨の花

(二十世紀梨の項参照)

バラ科の落葉高木で中国が原産。千葉県で作りに出された一品種が県内全域で栽培され、鳥取県の代表的な特産物となつた。葉は卵形、四月ごろにサクラに次いで白い美しい花を開かせる。果実は大形で球形、外皮に小斑点がある。東伯郡東郷町などの産額が多い。花の観賞価値も高い。



### 【県の木】ダイセンキヤラボク(大山の植物分布の項参照)

イチイ科に属する低木の針葉樹。国立公園に指定されている大山の頂上に大群落があり学術上評価が高く、昭和二十七年(一九五二)三月、特別天然記念物に指定された。大雪地帯に適応した植物で半年は、雪の下で生きる。枝は全て、シベリヤ方面に向かっている。花は春の初めにつくが目立たず、また、雌雄別株である。挿木で増えるので植木として売られており、庭木として珍重される。

### 【県の魚】ヒラメ(ヒラメの項参照)

平成二年に「第一回海づくり大会」が開催されたのに合わせて公募し、県が進める「育てる漁業」の一環として生産研究が行われていたヒラメが選ばれた。淡泊な味で、高級魚として知られる。

### 【鳥取県の慣習・行事など】

#### 《鳥取県の方言》

鳥取県の方言は、大きく分けて因幡・伯耆両地方で異なる。

因幡地方では、いわゆる訛は少なく、アクセント・イントネーションともに関西地方に似通っている。港町・山間部などでは、「マメ(元氣)・ダイツウ(おしゃれ)」など古語を由来とする方言がよく聞かれる。また町屋では物腰の柔らかい、接頭語・補助動詞表現が方言の特徴である。「ゴザンス・しナンセエ」

伯耆地方は、一般に雲伯方言とまとめられるよう、「ダンダン(ありがとう)」など、出雲・スズー弁と共通する方言が多く聞かれる。ラ行の子音が発音されない、八行の子音hはフィと発音する、といった特徴がある「フィサシブー(久し振り)」。

### 《トンドウ》

小正月に歳神を送る火祭りであるトンドウ行事は、本来、土居（どい・テイ）と呼ばれる小字単位で、氏神境内や橋のたもとなどで行われていたが、現在は大字単位で一か所にまとめて行われるところが多い。

県内では、気高町「酒津のトンドウ」が知られる。ここでは、松を芯とし、注連縄（しめなわ）を何重にも巻いた大きな円錐形の山が漁港に作られる。

一月十四日の午後、裸の小学生たちが海草を手にトンドウ場の周りと集落の家々を清める。翌十五日は、一時、二時、三時と触れが回り、四時の漁港のサイレンとともに火が点けられる。行事に子ども組が参加し、魔除け・御被いが加わっているのが特徴で、平成三年（一九九一）には県の無形民俗文化財に指定されている。



また、伯耆、特に弓浜地方では、講集団で歳徳神（としとくじん）をまつり、「トンドさん」と呼ばれる神輿（みこし）が巡行するのが特徴である。所によっては、笛・太鼓のお囃子（はやし）つきで「伊勢音頭」などを歌いながら、獅子や天狗も加わって行列を立てて集落内を門付けして回る。行列巡行後、円錐形に注連飾りを盛った山に火が点けられる。伯耆では、この山に大きな竹を十字に刺したり、扇子や紙製の鯛を飾ったりと派手なものが多い。

### 《正月行事》

因幡、伯耆の山間部では、俵を二つ置いた上にムシロを敷き、桶を載せる歳徳神飾り（としとくじん）がみられる。この桶を「歳桶」と呼び、一年十二か月を表す米十二合をはじめ、栗・ミカン・昆布・田作り・串柿・お金を入れる。そ

の他、伯耆地方の山間部には、鏡餅の古型とされる、おむすびを餅でくるんだ「力餅」を供える習慣も残っている。なお、この「歳徳神」を納戸（なんど）に祀る所もある。

正月二日は、仕事初め（はし）で、縫い初め（ぬい）・書き初め（かき）などが行われる。ところによっては蹴初めなどを行う。七日は七草粥とともに鳥追いが行われる。趣きの違ったところでは、境港市竹内に伝わる「オコナイ」行事がある。これは、大きな鏡餅を薬師堂に奉納する行事で、仏教の法会と農耕儀礼が習合した仏教民俗行事である。

### 《盆行事》

八月七日ごろから十三日くらいまで、かつては県内各地で盆市が立ち、盆を迎えるためのゴザ、オガラ（アサキ）、ボンゲタなどが売られた。鳥取県東部では、初盆を迎えた家の墓地に青い竹の花立てを贈る習慣があり、現在でも竹売りの姿が見られる。

十三日の仏迎えでは、家の前にシャラー棚と呼ばれる餓鬼（がきぶ）仏を供養する棚を設ける。夕方には、墓、続いて家の前で線香やオガラに火を点けて先祖霊を家へ招く。集落全体で仏迎えをする岩美町太田では、マンドウが点けられる。マンドウとは、竹を釣り鐘形に細工し、百八本のロウソクをつけたもので、初盆を迎えた墓前に立て、その前で女性たちが御詠歌や般若心経をあげる。

十五日から十六日にかけて行われる仏送りでは、シャラー棚や仏壇の供え物を川や池、海に流す。なかでも、中山町では、高さ四メートルにおよぶ藁のたいまつを作り、墓前で焼いて仏を送るマンドウ行事が町内各地に伝わっている。また、赤碕町では、新仏の位牌を舟に乗せて海に流すシャラー舟の行事もある。

## 【鳥取県の交通】

鳥取県は東西に長く、日本海に沿って走るJR山陰本線と国道九号が主要な幹線である。鉄道は、山陰本線から山陽方面と鳥取県をつなぐJR因美線と伯備線が分岐している。また、境港方面へは境線が結んでいる。平成六年には、智頭急行が営業を開始し、関西方面への移動時間が大幅に短縮された。

道路網は、中国横断自動車道岡山米子線が全通し、山陽方面へつないでいるほか、現在、鳥取市 松江市間をつなぐ山陰自動車道の整備が進められていて、一部（大山町と安来市間）が開通し、鳥取県と島根県が初めて自動車専用道路で結ばれた。「鳥取 米子間一時間構想」の実現に向けて期待が高まっている。また、関西方面をつなぐ中国横断自動車道姫路鳥取線の整備が始まり、高速道路網の拡大がさらに図られている。

また、鳥取県には二つの空港があり、いずれも市街地から近く利用の便が良い。東京、福岡、名古屋の各都市を結んでいる。

鳥取空港 鳥取市湖山 JR鳥取駅より空港バスで十五分

鳥取空港は、鳥取市街地から約七キロメートルの距離に位置し、日本海に面している。県東・中部および兵庫県北部をカバーしている。現在は、鳥取 東京便が定期運航している。

鳥取市に定期航空路開設が認可されたのは、昭和六年（一九三二）十一月七日のことで、城崎（きの）に本拠をおいた日本海航空株式会社によるものであった。空路は、三菱M・C第一号機（水上飛行艇）による円山川（まるとま）湖山池間であった。しかし折からの満州事変と不況のため未就航に終わった。

第二次世界大戦中、湖山砂丘裏に労働奉仕でできた湖山飛行場は、陸軍九八型グライダー輸送機のテスト飛行場となり、昭和十九年（一九四四）

には陸軍練習機ユングマン五〇機の練習場となった。

ついで、戦後の昭和三十二年（一九五七）五月二日、市営鳥取空港の開設が許可され、G級不定期飛行場として同年九月二十一日開港式が行われた。以来極東航空のDH・タブー〇人乗りが、週三回就航したが、経営状態は芳しくなく、また、滑走路の不足、無線施設の不備、乱気流と保安林の障害などの理由から休航となった。

鳥取県は地域開発のためにも近代的な地方空港の再建計画にのり出し、同三十八年（一九六三）調査を開始し、三十九年（一九六四）に運輸省に許可を申請した。続いて同年二月二十日に設置が許可され、海岸にほぼ並行した保安林地区に工事を開始し、同四十二年（一九六七）三月に完成した。四十二万平方メートルの用地の大部分は鳥取市の提供で、一部は鳥取大学の演習林を借用したものであった。ここに総事業費二億六千万円（内半額県負担）で長さ一、二〇〇メートル、幅三〇メートルの滑走路が完成した。併せて、民間出資の空港ビルや国の保安事務所も整備され、鳥取空港は日本にある地方空港二十九のうちの一つになり、三種F級に格付けされた。こうして、昭和四十二年七月三十一日には盛大な鳥取空港開港式が行われた。

昭和四十四年（一九六九）には鳥取 大阪便が就航した。（なお、大阪便は現在、廃止されている。）さらに安全性確保のために、一、五〇〇メートルに滑走路が延長された。昭和六十年（一九八五）七月滑走路が一、八〇〇メートルに延長され、鳥取 東京間を結ぶ定期航路にジェット機が就航した。さらに、平成二年（一九九〇）七月には滑走路が二、〇〇〇メートルに延長され、中型ジェット機の就航が可能となり、初の国際チャーター便が就航した。また、同年十二月から、鳥取 東京便は一日三往復に増便された。

平成十三年（二〇〇一）十二月から翌年二月まで、名古屋 鳥取 福岡



便の季節運航が実施されるなど、利用拡大が図られている。

米子空港 米子市大篠津 JR米子駅前より空港バス約三〇分

米子空港は、弓ヶ浜半島の砂丘地に位置する。県中・西部および島根県東部をカバーしている。現在は、東京、名古屋、福岡の国内三路線が定期運航しているほか、平成十三年（二〇〇一）四月からは、県民の長年の願いであった国際定期便（米子 ソウル）も就航し、山陰の空の玄関として期待が高まっている。

米子での民間空路は、昭和十三年（一九三八）六月、三柳<sup>みつやなぎ</sup>に空港が完成し、同十四年（一九三九）十月十日以降米子 大阪間に国内空路が開設された。ついで十五年（一九四〇）四月一日からは、朝鮮半島への日本海横断空路が開かれた。

しかし、昭和十六年（一九四一）以降、空港は陸軍航空隊の基地に転用され、被爆して荒廃した。一方、大篠津付近におかれた海軍航空隊美保基地は、終戦後、米軍基地となった。昭和二十六年（一九五一）一月以降、空路開設が可能となり、同二十九年（一九五四）十一月から極東航空が、基地の一部を借りて米子 大阪間に空路を開いた。

昭和三十年（一九五五）からは全日空が運航し、同三十一年（一九五六）二月には米子空港ビルが開設され、本格的な空港としてスタートすることとなった。ついで同三十八年（一九六三）六月一日には、米子 広島線が、同年十月十日には、米子 東京線があいついで新設された。

さらに昭和四十年（一九六五）四月一日から大阪線には、旅客機YS11機が運航するようになり、同年八月一日以降は米子 隠岐間も開かれた（現在両路線とも廃止）。平成三年（一九九一）四月には米子 名古屋線が就航した。

平成八年（一九九六）三月には滑走路が二、〇〇〇メートルに延長され、さらに平成十三年（二〇〇一）には二、五〇〇メートル化に向けての実施

調査計画が始まった。

また、国際定期便は、週三便運航し、米子とソウルを約九十分でつないでいる。

#### ●鉄道 山陰本線

東西の両文化地帯を結び、山陰の動脈として重要な機能を持つ山陰本線の延長は、京都から下関まで約六八〇キロメートル、鳥取県内だけで二〇キロメートルに及ぶ。

山陽線の全通が明治三十四年（一九〇一）であるのに対し、境を起点として御来屋まで開通したのが明治三十五年（一九〇二）十一月、そして鳥取まで延伸されたのは、明治四十年四月であった。鳥取京都間の全通は明治四十五年（一九一三）三月であった。山また山のトンネルや特に余部の鉄橋架設（日本最高四〇メートル）等の工事は至難をきわめたが、山陰は海岸線に沿っているため、日本の美しい男性的な景観が旅客を楽しませる。また、沿線には保津峡、城崎温泉、浦富海岸、鳥取砂丘等の山陰海岸国立公園、県内各地の温泉群、大山、美保ノ関、出雲大社と著名な観光地がある。

しかし、近年、新幹線、飛行機、長距離バスなどの整備が進むにつれ利用客が減少している。

#### 智頭線

智頭線は、兵庫県上郡<sup>かみごほり</sup>町と八頭郡智頭町の間五六・一キロメートルで、杉木立や美しい景観が続く。智頭線は現在、智頭鉄道急行株式会社が運営に当たっているが、当初は国鉄建設線として建設が進められていたものである。国鉄建設線智頭線（智頭～上郡）は、明治二十五年（一八九二）から鳥取・姫路を結ぶ鉄道として建設運動が展開されてきた。

昭和に入りようやく智頭・上郡間が建設予定線に編入された。昭和三十

六年（一九六一）五月、鉄道建設審議会において調査線に、続いて昭和三十七年（一九六二）三月に着工線に採択された。この鉄道は鳥取県東中部と阪神地方とを結ぶ最短路線で、大山、皆生、三朝温泉などの豊富な観光資源や、山陰地方の農林水産資源を京阪神地帯に結びつけ、山陰地方の後進性を打開する主要な動脈となるもので、関係者が早期建設を要望していた路線である。

昭和四十一年（一九六六）、工事実施計画が認可されたが、昭和五十四年（一九七九）には閣議で了解された「日本国有鉄道の再建」を受けて工事中止が決定された。

昭和六十一年（一九八六）五月、鳥取県、岡山県、兵庫県および関係市町村や民間企業が株主となり智頭鉄道株式会社が設立され、昭和六十二年（一九八七）二月に工事が再開された。

平成六年（一九九四）六月には社名を智頭急行に変更し、同年十二月に開業した。これにより鳥取駅と大阪駅は二時間三十分で結ばれた。

## 因美線

因美線は鳥取、東津山駅間七〇・八キロメートルを結び、姫新線、津山線によって姫路・岡山に通じ山陰・山陽の横断連絡線としてその重要度は高い。昭和七年（一九三二）七月に全通した。

沿線には、氷ノ山後山那岐山国定公園内的那岐山、紅葉の芦津溪のほか、因州和紙と佐治川石の佐治村、流しびなの用瀬町、アコと霊石山、牛戸焼の河原町など、名勝・史跡や名物が多い。



## 若桜線

若桜線は、因美線郡家駅から若桜駅に至るローカル線である。昭和五年（一九三〇）十二月に全通した。昭和六十二年（一九八七）から若桜町などからなる第三セクターによって運営され、地元住民の足として重要な役割を担っている。

沿線には氷ノ山や岩屋堂をはじめ、花御所柿の果樹園地帯、郡家町の土師百井廃寺塔跡や因久山焼など名勝史跡の地も多い。

## 伯備線

伯備線は伯耆大山駅から、岡山県倉敷駅まで一三八・四キロメートルを結び山陰・山陽を横断する幹線として重要な役割を担っている。昭和三年（一九二八）十月に全通した。このため広島・岡山・四国方面との連絡がたいへん便利になり、さらに山陽新幹線開通後は、大山・皆生温泉・出雲大社方面と京阪神、中東部日本を結ぶ動脈として重要性を増した。

また、特急・急行などが増強され電化が図られるなどして、これらの地方との間は一層時間的に短縮されてきた。

沿線には比婆道後帝釈国定公園をはじめ奥日野県立公園、オオサンショウウオ生息地、大山など、多くの史跡・名勝・天然記念物がある。

## 境線

米子市から境港市までの一八キロメートルを結ぶローカル線である。明治三十五年（一九〇二）十一月に開通した山陰最初の鉄道の主要区間である。なお、境駅 米子駅が「境線」と命名されたのは明治四十二年のことである。鳥取県の鉄道敷設は、境港が良港であることから建設資材を海上輸送し、ここから陸上輸送するため、明治三十三年（一九〇〇）十月から境港を起点として始められた。

米子駅から境港駅までを約四十分で走行している。弓ヶ浜半島を縦断し、沿線には、米子白ネギやさつまいもなどの産地がある。

交通の主な歩み

年号	内容
明治三十五(一九〇二)	山陰最初の鉄道開通(境駅)御来屋駅)
明治四十五(一九一三)	山陰線開通
昭和三(一九二八)	伯備線開通
昭和五(一九三〇)	若桜線全通
昭和七(一九三二)	因美線全通
昭和三十(一九五五)	戸倉トンネル開通
昭和三十二(一九五七)	鳥取市営飛行場開設
昭和三十六(一九六一)	国道九号白兔トンネル開通
昭和三十八(一九六三)	米子 東京便就航
昭和四十(一九六五)	境港に一万トン岸壁完成 大山環状有料道路開通
昭和四十一(一九六六)	国鉄智頭線起工
昭和四十二(一九六七)	鳥取・米子 大阪間特急バス運行開始
昭和四十四(一九六九)	三朝高原有料道路開通
昭和四十五(一九七〇)	鳥取)大阪便就航 蒜山大山有料道路路できる
昭和四十六(一九七一)	蒜山大山スカイライン開通
昭和四十七(一九七二)	国道五三三号改修、黒尾トンネル開通
昭和四十八(一九七三)	境水道大橋開通
昭和四十九(一九七四)	鳥取バイパス、津ノ井バイパスの完成
昭和五十(一九七五)	国道一八〇号全線開通
昭和五十三(一九七八)	鳥取駅高架完成
昭和五十四(一九七九)	鳥取 東京便就航
昭和五十六(一九八一)	人形トンネル・志戸坂トンネル開通 米子空港にジェット機就航

年号	内容
昭和五十七(一九八二)	国鉄伯備線・山陰本線(伯耆大山)知井宮間)電化開業
昭和五十九(一九八四)	米子 福岡便就航
昭和六十(一九八五)	倉吉線廃止
昭和六十一(一九八六)	鳥取空港にジェット機就航
昭和六十二(一九八七)	鳥取港が商港として本格スタート 智頭線建設工事再開
昭和六十三(一九八八)	若桜鉄道開業
平成二(一九九〇)	鳥取・米子 東京間に高速バス運行 鳥取空港の二、〇〇〇メートル滑走路完成
平成三(一九九一)	中型ジェット機が就航
平成四(一九九二)	初の国際チャーター便就航
平成六(一九九四)	米子)名古屋便就航 米子自動車道全線開通
平成七(一九九五)	一般国道四三一号全線開通 智頭線(智頭)上郡)開通
平成八(一九九六)	境港 中国・大連間に定期航路開設 境港 韓国・釜山間に定期航路開設
平成九(一九九七)	米子空港の二、〇〇〇メートル滑走路完成 中型ジェット機就航
平成十一(一九九九)	米子)札幌便就航
平成十三(二〇〇一)	米子)福岡便が就航 国際定期便(米子 ソウル)が就航

## 自然の恵みと味

鳥取県のおいしい食材たち



《魚介類》

松葉がに

鳥取県の代表的な冬の味覚の一つ松葉がにには、成長したズワイガニの雄のことで殻が固く、ハサミは大きく、ずっしりと重い。

鳥取県のズワイガニ漁は、十一月下旬頃から三月まで山陰沖の漁場で行われる。六〇〜九五トンの漁船が、長さ約二キロメートルに及ぶ二本のロープの先に袋網をつけて海底のカニをすくいとる「沖合底曳網」という方法で行われ、主に鳥取港、網代漁港、田後港、境漁港に水揚げされる。

鳥取県で松葉がに漁が本格的に始まったのは大正時代に入ってからで、明治二十二年（一八八九）に但馬から県東部にこの漁法（無動力）が伝わったのがきっかけである。

近年、松葉がにが江戸時代から食べられていたことが明らかとなった。「松葉がに」という名称が登場する最古の文献である弘化二年（一八四五）の『鳥取藩町目付日記』には、祝宴の献立に「松葉がに」が含まれていたことが記載されている。

松葉がにには、刺身や、茹でたり、焼いたりして食べたり、白菜を入れ

てカニすき（ちり）で食べたりする。また、カニみそと呼ぶカニの内臓は、

赤みそと砂糖、酒を少々入れて甲羅のまま火にかけて煮て、炊きたてのご飯にまぶして食べるとおいしい。

鳥取県では、平成十二年（二〇〇〇）に十一月の第四土曜日を「松葉がにの日」と定めた。この日を中心に県内の各産地では多彩なイベントが開催される。

若松葉がに

ズワイガニは、脱皮を繰り返して成長していく。脱皮してまもない雄のカニは、殻が柔らかくて軽く、また、肉に比較的水分が多いため、以前は「水ガニ」と呼ばれた。一尾当たりの価格も松葉がにの十分の程度である。

平成十三年（二〇〇一）三月から、鳥取県松葉がにPR推進協議会では、「水ガニ」を「若松葉がに」と名称変更し、身が柔らかく食べやすく、おいしいこのカニのイメージアップを図っている。

親がに

成熟したズワイガニの雌で、「子持ちガニ」とも呼ばれる。松葉がに

に比べ値段も手頃なことから、鳥取県ではかせかない冬の食材である。

産卵後、腹部に抱える成熟した卵は「そとこ」、甲羅の中の卵巣は「うちこ」と呼ばれる。

短冊切りした大根と親がにを入れてたみそ汁は、県内でよく食べられる家庭料理である。カニの香りやおいしさを無駄なく味わうことができる。

ベニズワイガニ

ベニズワイガニは、昭和四十五年頃からイカ釣漁業を行わない時期の漁として始まった。

九月から翌年六月までの十か月間に、直径一・二〜一・五メートルのかごに餌となるサバを入れて、水深八〇〇〜一、八〇〇メートルの海底に沈めて漁獲する。

境港には、全国のベニズワイガニの約七割が水揚げされ、その多くはカニ爪肉、棒肉などに加工され流通している。

スルメイカ

日本でよく食されるイカに、スルメイカ、ヤリイカ、コウイカ、ホタルイカなどがあるが、境港で一番多



煮たりして食べられている。

#### ハタハタ

県東部の田後、網代漁港を中心に、九月から翌年五月にかけてハタハタが水揚げされる。

ハタハタ漁は、秋田沖の漁獲が不振となった昭和五十年代後半から盛んに行われるようになり、現在、鳥取県の水揚げ量は全国で上位にある。

各漁港では、ハタハタを甘塩で一晩干した「干しはた」が作られている。そのほかにもハタハタすしや煮付け、小さいものは南蛮つけにして食べられている。

#### ヒラメ(県の魚参照)

ヒラメは、鳥取県周辺の砂浜海域に生息する代表的な魚であり、平成二年には「県魚」となった。

三〜五月には、大型のものを刺網や一本釣りで、春から秋には小型底曳網で漁獲される。県内の各漁港で水揚げされる。

県では、「獲る漁業から育てる漁業」を目指し、昭和五十六年(一九八一)に栽培漁業センターを開設した。ここでは、ヒラメをはじめ、クルマエビなどの稚魚の生産が研究さ

れ、大量に種苗放流を実施するなど、資源の増殖と安定した漁業に向けた取り組みがなされている。

また、平成三年(一九九一)、世界初のクローンヒラメの開発に成功している。

#### トビウオ

トビウオは「アゴ」とも呼ばれる。能登沖にある産卵場を目指し、対馬暖流にのって日本海を北上する群を、まき網、刺し網、流し網で漁獲する。県内では主に赤碓港、田後港、夏泊漁港、酒津漁港で水揚げされている。

トビウオは、刺身にしてカレギをまぶして食べたり、つまれにしてみそ汁に入れたり、焼いたりする。

また、鳥取県の名産の一つに「あごちくわ」がある。トビウオの身をすり、味付けしたものを竹に巻きつけて焼いたもので、こうばしとあごの豊かな香り、そして歯ごたえのある食感が特徴である。

#### イワシ

イワシは近海で獲れる比較的庶民的な魚である。境港は、周辺に処理能力の高い水産加工施設が多くある

くとられるのはスルメイカである。

スルメイカの寿命は一年で、この間に三〇センチ位まで成長する。新鮮なものには胴に黒褐色の斑点があり、その斑点を指先ではじき明滅すると、活きの良い証拠である。これは「イカの提灯」と呼ばれる。

イカ漁は、集魚灯でイカを集め、疑似餌で釣り上げる。主な漁場は大和堆や山陰沖で、魚群を追い北海道まで北上する。

スルメイカは、他のイカに比べ利用範囲が広く、刺身、フライ、塩辛、干物などで食べられる。田後・網代漁港で作られる「甘塩スルメ」は、薄味で、肉厚、そして柔らかい。あぶって引き裂いて食べるほか、天ぷら、フライなどにする。

県中・西部の海沿いの地区では、「イカ飯」が食べられる。イカの足をワタを抜いて洗い、その中に、一晩水につけたモチ米と細かく刻んだ人参、干し椎茸などを混ぜたものを詰めて、しょうゆ、砂糖で味付けしただし汁で炊き上げる。

また、網代漁港などでは、イカの子をすり、小麦粉を入れて団子や餅の形にして熱湯で茹で、焼いて生姜じょうゆで食べたり、野菜と一緒に



ことなどから、マイワシの水揚量が、平成四〜八年の五年間、日本一であった。漁は、大中型まき網業で、通年行われる。しかし、近年、マイワシ資源が激減しており平成十三年（二〇〇一）には境港では全く獲れなくなってしまった。

マイワシを骨ごと包丁でよくたたき丸めて作ったイワシ団子は、だし汁で煮たり、みそ汁に入れたり、揚げたりといういろいろな味わいができる。

また、マイワシより魚体が小さく、沿岸部に分布するカタクチイワシで煮干しなどが作られている。

### サバ

日本海のほぼ全域に生息し、鳥取県でも水揚量の多い魚である。煮たり、焼いたり調理法もさまざまである。

サバは、血合肉の割合が高く、魚体の大きさに比べ内臓量が多いため、鮮度が落ちやすい。このようなことから刺身など生で食べられることは少ない。東部の酒津漁港では鮮度の良い間に、サバを背開きにして甘塩で味をつけた「塩サバ」や竹くしにさして素焼きにした「焼きサバ」

を加工している。「塩サバ」は焼いて食べ、「焼きサバ」は軽くあぶってしょうゆをつけたり、ネギと煮たりして食べる。

郷土料理の「ねぶかめし」は、身をほぐした焼きサバとねぶか（ネギ）を砂糖、しょうゆ、酒で甘辛く煮て、ごはんに混ぜたものである。

サバには脳の働きをよくするといわれるDHAが多く含まれており、栄養豊かな魚である。

### 岩ガキ

初夏から八月末にかけて、県内の磯では潜水によるイワガキ漁が行われる。一般的に、「カキは冬のもの」と思われがちであるが、日本海のイワガキは夏に旬を迎える。殻付きのまま、レモン汁をたらして食べると、「海のミルク」といわれるにふさわしい濃厚な味が広がる。

天然礁のみで行われていた漁獲が、平成に入り人工増殖場でも本格的に始まった。県内の各漁港で水揚げされ県内のスーパーや鮮魚店、直販所などで販売されている。鳥取県の夏の味覚の一つである。

### アユ

県内の三つの一級河川（千代川、日野川、天神川）では、六月一日の解禁とともにアユ漁が始まり、夏の訪れを告げる。

このアユ漁は、昭和五十年（一九七五）に千代川漁業協同組合に大規模な生産施設が設けられ、人工種苗の大量放流がきっかけに盛んになった。その後、日野川漁業協同組合にも同種の施設が整備された。これらの川では、現在、アユ資源を増やすため毎年三百万尾以上の稚魚が放流されている。

八頭郡河原町や日野郡日野町には、アユ料理の専門店もあり、アユずしなどが堪能できる。

### いぎす草

「えこのり」とも呼ばれる。主に県中・西部で食べられ、赤碕漁港、御崎漁港、御来屋漁港で水揚げされている。

このいぎす草をもどして、とろ火で煮とかし、容器に入れて固めた料理を「いぎす」という。薄く切り、酢味噌や辛子しょうゆ、しょうがしょうゆで食べる。海の豊かな香りと独特の歯触りが特徴である。



## 《農作物》

### 二十世紀梨

鳥取県で栽培されている梨の中心品種である二十世紀梨は、東郷町など三十二市町村で栽培され、梨栽培面積の七十五パーセントを占める。

二十世紀梨は、明治三十七年（一九〇四）に千葉県より導入された。黒斑病や天災によって、幾度となく栽培の危機に直面したが、先人の努力によって克服され、「二十世紀梨」は鳥取県の主要な特産物となり、生産量で日本一となった。

現在、京阪神を中心に全国へ出荷されている。また、東南アジア、アメリカなどに輸出され、その甘さとみずみずしさから高級フルーツとして取り扱われている。

近年、二十世紀梨の栽培面積は、後継者不足などの理由から減少しているが、二十一世紀になっても変わらぬおいしさを提供するとともに、「ゴールド二十世紀梨」など新たな梨の栽培にも取り組んでいる。

### 花御所柿

花御所柿は、鳥取県東部因幡地方のみ栽培されている品種であり、他の柿に比べて甘いことで知られ

る。約二百年前に郡家町の野田五郎翁が大和国から枝を持ち帰り接木したのが始まりと伝えられている。栽培が本格的に始まったのは明治時代で、現在、郡家町を中心に栽培されている。十一月下旬から十二月上旬に食べ頃を迎える。

このほかに「富有柿」「西条柿」などが栽培されている。

### ぶどう

鳥取県の本格的なぶどう栽培は、明治四十年代に始まり、大正十年（一九二一）には、ぶどう組合が結成され県外に出荷している。

昭和四十年代後半から「巨峰」が導入され、県内全域に広がった。

現在、倉吉市、北条町など中部地区の市町村を中心に、主に「巨峰」「テラウエア」「ピオーネ」の三品種が栽培され、県内及び大阪市場で販売されている。

### すいか

鳥取県のすいか栽培は、明治時代に始まった。東伯郡内で「大山すいか」が導入され、大正末期には栽培面積六〇〇ヘクタールにもなった。その後、病気などによって一時栽培

が途絶えたが、昭和二十五年（一九五〇）には四〇〇ヘクタールにまで回復し、現在、生産量は全国四位である。

特に、大山の裾野に広がる黒ぼくの丘陵地で栽培される「大栄スイカ」は、全国でも三位の出荷量を誇る。

このほか倉吉市などで、ハウスやトンネル栽培が行われ、六月上旬から七月下旬に出荷、主に京阪神で販売されている。

### ながいも

栄養価が高い食材として知られるながいもは、昭和二十七年（一九五二）に砂丘地のかんがい施設の整備が始まったこととともない、盛んに栽培され始めた。

現在、大栄町など北条砂丘地を中心に五一ヘクタールで栽培されている。近年は、貯蔵施設の利用によって周年出荷し、主に九州で販売されている。

### らっきょう

らっきょうは、鳥取砂丘で栽培される代表的な作物である。

明治四十二年（一九〇九）に一七ヘクタールで栽培されていたという

## なつかしいふるさとの味

記録があるが、本格的に栽培が始まったのは、防風林とかんがい施設が整備された終戦後である。

砂地で栽培されるらっきょうは色が白く、きれいに仕上がる。最近では、健康食品として人気がある。現在は、京浜及び京阪神で販売され、生産量は全国第二位である。

### 白ねぎ

白ねぎは、県内の砂丘地で栽培されている代表的な作物の一つであり、昭和四年頃に弓ヶ浜で栽培が始まったと言われている。

現在、「春ねぎ」「夏ねぎ」「秋冬ねぎ」と周年栽培が可能となり、米子市から境港市にかけての弓ヶ浜を中心に栽培され、主に京阪神に出荷されている。

### 《酪農製品》

#### 鳥取和牛

鳥取県の和牛飼育の歴史は古く、江戸時代、「大山牛馬市場」は当時の日本三大市場の一つであった。鳥取県の和牛は良好な発育、飼いやすさなどの点で評価が高く、主産地として数多くの良牛を生産してきた。これらは「因伯牛」として有名であ

り、各県の改良基礎牛として貢献してきた。

平成三年（一九九一）から、「鳥取和牛」として売り出されている。ふくよかな香り、まろやかな口あたり、ほどよい霜降り、あざやかな色あいと光沢など、和牛のおいしさが凝縮されている。

### 乳製品

県外でも高い評価を受けているものの一つに乳製品がある。大山のふもとの豊かな自然の中で育った乳牛の良質のミルクから牛乳をはじめアイスクリーム、ケーキなどさまざまな製品が作られ、県内はもとより京阪神でも販売されている。

県内の酪農家によって結成されている大山乳業農業協同組合は、鳥取県の乳製品製造のほとんどを担っている。

### 《郷土料理》

#### 大山おこわ

鳥取県西部、大山のふもとで祭りや季節行事などで食べられてきた家庭料理である。もとは、大山で修行する人たちにふるまわれていた精進料理の大山寺のおこわが、家庭に入り現在の「大山おこわ」へと変わっていったといわれる。

もち米に、椎茸、ゴボウ、栗、こんにゃく、油揚げ、鶏肉などを混ぜて、だし汁、酒、砂糖、しょうゆなどで味付けし炊き込んだものである。

各家庭や地域によって具も異なりそれぞれの味がある。具が豊富で、栄養のバランスがよい料理である。

#### いただき

米子から弓ヶ浜にかけて伝わっている家庭料理である。

大判の油揚げに、米、さがけした人参とごぼう、細かく刻んだ干し椎茸を詰めて、つま楊枝で口をふさぐ。大きめの鍋に並べて、しょうゆ、砂糖、酒、こんぶだしを注いで煮る。かつては、祭り料理や漁師の弁当として作られていたようである。

「いただき」という名前は、みんな







なで「いただきます」と言つてたべることや、頭にかぶる傘の内側のつべんにいれる三角錐の綿入れ（いただき）の形に似ていることに由来するといわれる。

また、「ののこ」「ののこめし」とも呼ばれる。「ののこ」とは、寒いときに着る半纏はんてんをさす、この地方の方言である。厚揚げに「ご飯が詰まったぶつくら」とした形容が半纏はんてんに似ていることから呼ばれているようである。

#### いがい飯

県内の漁村では、磯でいがい獲りが行われている。特に海が比較的穏やかなる初夏から盛んに漁が行われる。いがいは、三角型の形をした貝殻の色が黒褐色の貝で、岩礁に着生している。フランス語ではムール貝あまという。青谷町夏泊では、海女あまによるいがい漁が行われ、民宿などで食べることができる。いがいの身は味がよいことから吸い物やいがい飯に用いられる。

いがい飯は、殻から身を外し、しよゆ、酒、みりん、だし汁などでいがいと米をたきこんだものである。あつさりとした味と磯の香りが

特徴である。

#### ばばちゃん鍋

「ばばちゃん」とは、別名「ばば」とも呼ばれる深海魚である。学名を「タナカゲンゲ」という。

県東部の岩美町では、数年前からこの魚のおいしさを多くの人に知ってもらおうとさまざまな料理作りを行ってきた。

この「ばばちゃん」は、外見はグロテスクであるが、白身であつさり味。かつては地元の漁師の間だけで食べられていた食材であるが、今では、なべ、から揚げ、煮付けなどに調理されている。なかでも「ばばちゃん鍋」は寒い鳥取の冬を代表する味の一つになった。

ばばちゃん鍋は、地元では次のように作られている。まず、腹開きにして骨のついた片身の血合、内臓を取り除き、よく水洗いする。皮をむき、五センチ位のぶつ切りにし、湯とおしする。ばばちゃんの頭を水にいれてだしをとり、しよゆで味をととのえ、ばばちゃんの身、豆腐、野菜を入れる。

#### 小豆雑煮あじきぞうじ

鳥取県内の多くの地域、特に日本海に面した市町村では、昔から正月に小豆雑煮が食べられていた。小豆雑煮が食べられる地域は、石川、兵庫、島根など日本海側の一部の地域に限られているといわれる。

各家庭で多少味は異なるものの、事前に煮ておいた小豆を水に入れ、砂糖、塩で味をととのえる。

## 伝統の技と美

### 鳥取県の工芸品



因州和紙 佐治村・青谷町

因州和紙の歴史は定かではないが、古くは平安時代の『延喜式』に因幡国から朝廷に紙が献上されたことが記されている。

また江戸時代には、藩の保護、奨励があり紙業が本格的に始まった。特に因幡地方の青谷地区と佐治地区は藩の御用紙を扱っていたこともあり、盛んに生産された。戦後、生活様式の変化等に伴い紙の製造に大きな打撃を受けた。

現在、県内では青谷町と佐治村で製造され、画仙紙などの書道用紙や工芸紙、染色紙の開発・生産により、他産地を圧倒し、多くの和紙愛好家や書道家に愛用されている。

また、近年伝統技術を基礎として、和紙の特性や機能性を活かして現代の生活様式などに合わせた新製品の開発もなされている。因州和紙は、昭和五十年（一九七五）には国の伝統工芸品、五十一年（一九七六）には県の無形文化財に指定されている。

弓浜絨 米子市

鳥取県西部の弓ヶ浜で織られてきた絨は「浜絨」「弓ヶ浜絨」と呼ばれ、素朴な絵柄とぎつくりした風合

と藍と白のコントラストが特徴である。江戸末期に弓ヶ浜で綿花の栽培が始められ、主に自家用衣料として綿布に織られていた。

江戸時代末期から大正時代にかけて絨織りと綿作りは最盛期を迎えた。江戸時代には、藩の保護と指導のもと、各農家で盛んに生産され絨の生産技術はさらに進歩した。

現在は、着物地のほかテーブルセンターやのれんなどが作られている。

倉吉絨 倉吉市

倉吉市では江戸時代から木綿が特産品として生産され、全国の商人が往来していた。そんな中で亀甲、山水、松鶴などの模様に見られるような美術的で精巧な絵絨が生まれ、明治時代には全国へと販売され、急速な発展を遂げた。

しかし、大正時代には他産地の機械化の導入により衰退していった。昭和四十六年（一九七一）に倉吉絨保存会が結成され、継承されている。

流しびな

旧暦三月三日、災厄を人形に託して川に流す流しびなの行事が古くか

ら鳥取県東部で行われてきた。

赤紙に胡粉で白い梅の花を描き、金の烏帽子にはかまを着けた男びなと女びなを組み合わせて、さん俵やオシキにのせたものが用いられていた。

現在も、八頭郡用瀬町と鳥取市では毎年ひな流しの行事が開催されている。また、その愛らしさや可憐さから郷土玩具としてだけでなく、土産品としても製品化されている。

はこた人形 倉吉市

倉吉市の郷土玩具で、著名な張り子の人形である。江戸時代後期の天明年間に備後屋治兵衛が倉吉の素朴でつつまじやかな娘に惹かれ、これをモデルに人形を作ったと言われる。「はこた」という言葉は「おぼこ娘」を意味する。

作り方は、桐の木型に和紙をのりで張り重ね、乾燥させて型から抜き取る。その後、胡粉で下地を塗り、泥絵の具で彩色し、にかわでつや出ししてある。かつては「ハー」「サン」と呼ばれ、幼い女の子の遊び相手として求められていた。

倉吉市新町の「赤瓦」（伝統建造物保存地区内）で、平成十年（一九



九八）倉吉市の無形民俗文化財保持者に指定された備後屋六代目三好明氏が製作実演している。

木彫人形十二支 岩美町

約二百年前、木地師・小椋佐兵衛が作州より鳥取市吉岡に移住し、挽物を製作したのが始まりと言われている。当時、木地師は山に入って自由に木を取ることが許されており、木を求めて、全国の山を歩いてきた。小椋佐兵衛の流れをくむ小椋家の七代目が、独創的なデザインによる木彫十二支を製造した。

泥絵の具で色鮮やかに彩色され、それぞれの動物の特徴をとらえた人形は、素朴な中にユニークな表情をうかがわせている。昭和三十九年（一九六四）には、年賀切手の図案に採用された。

### 《焼き物》

鳥取県で焼き物が始まったのは江戸時代からで、良質の土や石に恵まれた県東部と西部で盛んに行われた。特に寛政年間に始まった藩の「国産品保護開発政策」のもと、藩の中心地であった現在の鳥取市周辺では、藩の保護策を受け、多くの焼き物が作られた。

まず、因久山がお手懸かりとなり、以後、磁器製品開発の奨励のもと吉成焼（磁器）、浜坂焼（磁器）、賀露、浦富などの窯が創始された。

藩は、一時期、因幡における他国（他藩）の商人による売買や他国からの仕入れを禁止した。藩内の窯でまかなわれていたこともあったがやがて輸入も許され、久能寺などの御懸りも民営となった。

十八世紀になると、半ばころより数多くの民窯が興廃した。会見焼、法勝寺焼、落合焼、賀露焼、福井焼、浜坂焼、吉成焼、浦富焼、曳田焼、牛ノ戸焼などでは、日用雑器が焼かれていたが、これらがいずれも業を廃してしまつた中で、昭和初め、民芸運動の指導者であった吉田璋也の努力で現代民窯として復興し、現在に至っている。中井窯、浦富窯も吉

田の指導のもと復興した。

現在、県内には約三十の窯がある。

因久山焼（久能寺焼）郡家町

「因久山焼」は、古くは久能寺焼といった。因久山焼という名称は、因幡の久能寺焼に由来する。

久能寺は、八頭郡郡家町の八東川と私都川が合流する付近に位置する。二つの川から運ばれて堆積した陶土は良質であった。

また、垂仁天皇に野見宿禰土蔵を造つて献上したところ、天皇より土師姓を賜つたといわれ、久能寺の付近には土師百井という地名や土師神社があるなど、古代から製陶業に携わっていた人たちがいたことを示す。二百年余り前の明和年間のころに藩主・池田家に御用焼を承った。このとき京都からやってきた陶工が御室焼の陶法を伝えている。

その後、藩主の保護のもと陶法の研究が重ねられ、近江の国から招かれた陶工が信楽焼の技術を取り入れることで、現在に伝わる陶風が確立された。一時、民営になったが藩窯としての性格を担う窯であった。因久山焼には茶道具をはじめ徳利、油壺、煮皿などの日用品も多くある。



現在の因久山焼は、淡い青色と乳白色の流れ模様が基調となっていて、茶道、華道用品を中心に製作されている。

牛ノ戸焼 河原町牛戸

牛ノ戸焼は、天保年間（一八三〇～一八四四）に石州から来た職人が伝え、現在まで民窯として継承された。牛ノ戸焼は焼くと硬くしまり、堅牢で壊れにくく、水がめ、徳利、井、小鉢などが造られている。明治から大正時代に全盛時代を迎え、因幡から美作、若校で販売されたほか、徳利は遠く北海道まで運ばれていた。

その後、他地域の焼物に圧倒され衰退したものの、昭和初期に吉田璋也の指導のもと復興し、民窯陶器として全国に知られるようになった。現在、主に徳利、すり鉢などの食器や茶器、花器などの日用雑器が焼かれている。

上神焼 倉吉市上神

上神焼は倉吉市上神地方に興ったやきものをいう。中でも「伯尾山窯」「伯州尾山窯」は歴史が古い。「伯尾山」は、弘化年間（一八四四～一八

四八）に地元の富豪が窯を手に入れ、本窯を築き、京都、但馬から陶工を招き茶器を焼かせたのがはじまりといわれる。その焼物には「伯尾山」と刻印された。

また、文久三年に当地へやってきた陶工が焼いた作品には「伯州尾山」と刻印されている。

その後絶えかけたが、明治二十九年（一八九六）、清水焼の名工を招いて再興されたのが亀玉山である。その後も伯面山、玉伯と廃業、再興が続いた。

現在の上神焼上神山窯元は、昭和七年（一九三二）に加賀の平野洞雲が開窯したものである。京風の作りに入れられた色鮮やかな焼物の特徴である。主に、茶器、酒器、食器などが製作されている。

法勝寺焼 西伯町

法勝寺焼は、明治三十六年（一九〇三）、落合窯・松浦久治郎の弟子であった安藤秀太郎が久治郎の死後、陶業を伝承し「法勝寺焼」を創設した。

しかし、法勝寺焼のもととなる「落合焼」は伝承によると、約二百

五十年前に江州（滋賀県）の陶工によって始まったと伝えられているが、寛政五年（一七九三）松浦助六が西伯郡西伯町落合に開窯し日用陶器を焼いたのがはじまりといわれる。この窯の製品は、一時、会見焼などと呼ばれた時期もあった。

法勝寺は、江戸時代、山陽に抜ける主要路にあたり、奥日野地方のたたら製品はここを通った。その帰りに焼物を奥地へ運んだと伝えられている。日野郡をはじめ、備中、備後出雲など幅広く販売されていた。

焼き上がりの柔らかさが特徴で、主に茶器、花器、食器などが製作されている。現在ある法勝寺焼松花窯は安藤秀太郎の開窯によるものである。

また法勝寺焼皆生窯は、二代目が松花窯の脇窯として皆生に登窯を築いたのが始まりである。手法や焼成は勝寺焼松花窯と同じであるが、皆生の砂や日野川の砂鉄を粘土や釉薬に混ぜるなど新しい試みがなされている。



中井窯

昭和二十年（一九四五）に開窯した新しい窯である。鳥取の民芸家・吉田璋也の指導を受け、用の美を大切にした、健康的で使いやすい民芸品が製作されている。

地元の粘土を使用し、黒・緑・白の釉薬に特徴がある。主に食器、茶器、花器が製作されている。

浦富焼 岩美町浦富

現在の岩美町浦富にあった磁器窯で焼成された製品をいう。江戸末期から明治維新によって、廃藩になるまでの数十年間、染付の日用雑器が焼かれたといわれる。鳥取藩の記録によると、浦富の焼物には田後村の土が用いられ、主に日用品を造り、浜坂焼などとともに因幡の需要を充たしていたという。

浦富焼の窯跡についてはその規模や形など不明であるが、昭和四十三年（一九六八）、県工業試験場の研究によって再現に成功した。

昭和四十六年（一九七一）、桐山城祉の山麓に窯を築き、白磁、染付、黒刷毛の磁器の茶器、花器、食器が製作されている。

## 《酒造》

鳥取県の人口一人当たりの清酒の消費量は全国でも有数である。

現在、県内には東から西にわたり三十近い酒蔵があり、地域色豊かないろいろな酒が造られている。鳥取県は、日本海に面し、背後には中国山地がある。冬の冷たい季節風はこの中国山地にぶつかり、鳥取県に雪を降らせる。寒暖のはつきりした気候である。冬の寒さをはじめ、中国山地に降り積もった雪がもたらす豊かな水、そして澄んだ空気など美酒がうまれる環境が整っている。

また、県内の酒造りには主に「玉栄」、「山田錦」などの酒米が使用されている。これらの酒米の約三分の二が県内産米である。

かつて鳥取県には「強力」という鳥取県特産の酒米があった。明治時代に開発され、大正時代に最盛期を迎え、以後次第に減少した。この強力は、精米度が上がっても心白部分が壊れにくいという性質があり、「山田錦」同様に酒造りに適した米である。その反面栽培しにくいという欠点もある。

一時期栽培が途絶えていたものの十数年前からこの「強力」を使用し

た酒も造られ始めた。

しかし、全酒米使用量はまだ少なく、鳥取県の特産米による酒造りが期待される。